

管理職の経験継承とは

桂島 剛（日本ダクタイトイル鉄管協会 東北支部長）（元仙台市水道局職員）

平成 23 年 3 月、私は仙台市水道局給水部管路整備課の主幹として在席していました。通常は、特命事項の処理と発注工事の設計の照査的業務を行っておりました。また、災害発生時においては、課長の補佐をすることとなっておりました。

宮城県は、概ね 30 年に一度のペースで宮城県沖地震が来ることは想定されており、前回は 1978（S53）年 6 月に発生していますので、何時来てもおかしくない頃だなとは考えており、実際、地震が起きた時もやっと来たかと思いました。

しかし、今回の地震は想定を大きく超え、地震の揺れは想定よりさらに大きく長い時間続きました。そして、大津波それに伴う原子力災害が発生したのでした。津波は沿岸地区に壊滅的な被害を及ぼし、原発は風下に当たる地域に大きな被害を与え、今現在もその地に帰ることができない地区があるほどです。

地震発生時の状況ですが、私は事務所内で通常業務を行っておりましたが突然あの大きな揺れに襲われ一瞬驚きましたが、水道庁舎は平成 2 年に完成しており耐震強度には不安はなかったものの、天井崩落の可能性があった為その辺を注意し、恐怖でしゃがみ込んでいる同僚を励ましながら揺れが収まるのを待ちました。その後は、課内各係で現在現場が動いている工事の現場の安全確認を行うと共に職員の安否確認を指示しました。幸いなことに、工事現場での事故や職員の人的被害はありませんでした。その後、災害対策本部へ参加し断水状況や各施設の被害状況、翌日以降の応急給水の計画などを確認した後、自班の段取りを行いました。そして、自家発電設備が完備している本庁舎内のテレビで津波被害の状況を目の当たりにし被害の過酷さを感じていました。その日は、一旦帰宅し家族の安否と自宅の確認を行い、数日職場に泊まれる用意をして職場に戻りました。自宅は食器類が多少散乱した程度で建物も大きな被害はなく、家族も全員無事、子供も大学生ということで水や食料には多少不安はありましたが、水道施設の復旧に専念できる状態でした。

私が所属していた管路整備課の通常業務は、送・配水管の新設や更新でしたが、災害時は「管路連絡班」として「各配水班」へ必要な人員と車両を派遣することが主な業務となっており、職員を派遣した後は派遣した職員の食料の手配などが主な業務となっており、残された管理職員や事務職員は本庁舎内の他班の応援などを行っていました。

一方、今回の地震で特に被害の大きかった市内北西部の丘陵地及び市中心部を管轄する北配水班（泉区、青葉区担当で別庁舎）では、天井崩落や通信設備の途絶など大きな被害を受けた状況で、東京都や札幌市の応援隊に協力をもらいながら復旧活動を行っていました。

しかし、広範囲で膨大な数の破損個所の修繕は、他都市から応援を貰っているとは言え、なかなか進まない状況でした。そのような中、当時実務担当者による復旧作戦会議に班長代理として参加していた私に、以前から懇意にしていた北配水班長より、泉区の南側について復旧の指揮を執ってもらいたいとの申し入れがあり、やっと復旧活動に参加することになりました。泉区は、平成元年の合併以前は泉市の市域で、私はその泉市で採用され以後ずっと水道で業務を行ってきました。合併後も泉区内で業務を行っており、メーター検針から漏水修繕、水質検査、浄水場運転、配水管工事など様々な業務を行ってきていました。

復旧作業に当たっては、優秀な部下数名と作業班 1 班をあてがっていただき、福岡浄水場系の配水幹線の立ち上げ、流出した送水管の代替ルートを新設しての配水池（2,000m³）立ち上げ、その下流の団地の水張り等、早朝から夜まで作業を行い短期間で業務を完了しました。約一か月に及ぶ復旧作業が落ち着いたころからは、石巻市の津波被害地区での管内カメラによる調査などにも携わらせてもらうと同時に、同地域の被害状況なども視察しました。テレビの映像などで被害の状況は見ていたつもりでしたが、現地を直接見ることでその悲惨さと被災地の人たちの逞しさを改めて感じる事が出来ました。

今この大震災を振り返ってみると、災害は必ず来るということを常に心に留め、その場になって慌てないよう立場に応じた自分が果すべき役割を確認しておく、そしてそれを実現出来るよう訓練を重ねておくことが必要であると感じました。

また、臨機応変な対応が必要となる指導的立場となる職員は、水道職として多様な知識と経験を積み重ねながら育てていくことが大切であるということも改めて感じました。

最後に、この度の震災に際し支援を頂いた多くの皆様に改めて感謝申し上げます。